

やしの実不思議塾2nd

# ティーンズ怪談学校作品集



みどりの翼増刊号



## まえがき

昨年に引き続き、今年もティーンズ怪談学校の作品集をお届けします。昨年は地元につつまる六人の高校生の「怪談」を掲載しましたが、今年は中学生の参加があり、あわせて五人の作品を、昨年同様、作家の悠崎仁先生の講評と共にご覧いただきます。

昨年の作品集のまえがきで、私はこのように記しました。「どんな土地にも、その土地にしかない不思議な物語や言い伝えがあります。不思議こそ土地の魅力の核心と言っても、言い過ぎではないでしょう。この頃はこうした不思議を探すのがとても難しくなってきたといわれますが、本当でしょうか。私は、ティーンズなら新鮮な目で田原の不思議を見つけることができるのではないか」と思いました。「今年も郷土のさまざまな不思議を十代のセンスで新たに見出し、魅力的に表現していただくことができたいと思います。今年のティーンズ怪談学校は、「やしの実不思議塾」という事業の第二回として実施したものです。この命名は、一八九八年に田原市内の恋路ヶ浜で民俗学の創始者・柳田國男が拾った椰子の実にちなみました。近年では柳田國男は、

文豪・泉鏡花と共に近代日本の幻想文学に大きな影響を与えた人物としても評価されるようになっていきます。実は田原市とも縁がある泉鏡花と柳田國男。この二人にちなんで、今年から来年にかけて、田原市図書館は「ふしぎ文半島学プロジェクト」と銘打ち、ふしぎな物語の数々に彩られたこの渥美半島から、幻想文学の魅力を発信します。この作品集は、まさに世界中で愛読される「ふしぎ文学」と、渥美半島そのもののふしぎな魅力をつなぐ、小さいけれど意義深い一冊となり得ているのではないのでしょうか。

ここに掲載した作品は、すべて本年七月二十九日に田原文化会館で開催したティーンズ怪談学校における悠崎先生のワークショップでの創作です。読者の皆様には、ふるさとへの創造的な関わりを、文芸という形で見せてくれた五人の若い作家たちに、ぜひ、感想をお寄せください。田原市中央図書館に送っていただければ、責任を持ってご本人にお届けします。よろしくお願いいたします。

最後に、悠崎仁先生をはじめ、この企画にご協力くださったすべての皆様に心から感謝申し上げます。

まえがき

目次 / 作品舞台地図

優秀作品

山の中の喧嘩塚

参加作品

傷の話

あの子

父の昔物語

沼

1

2

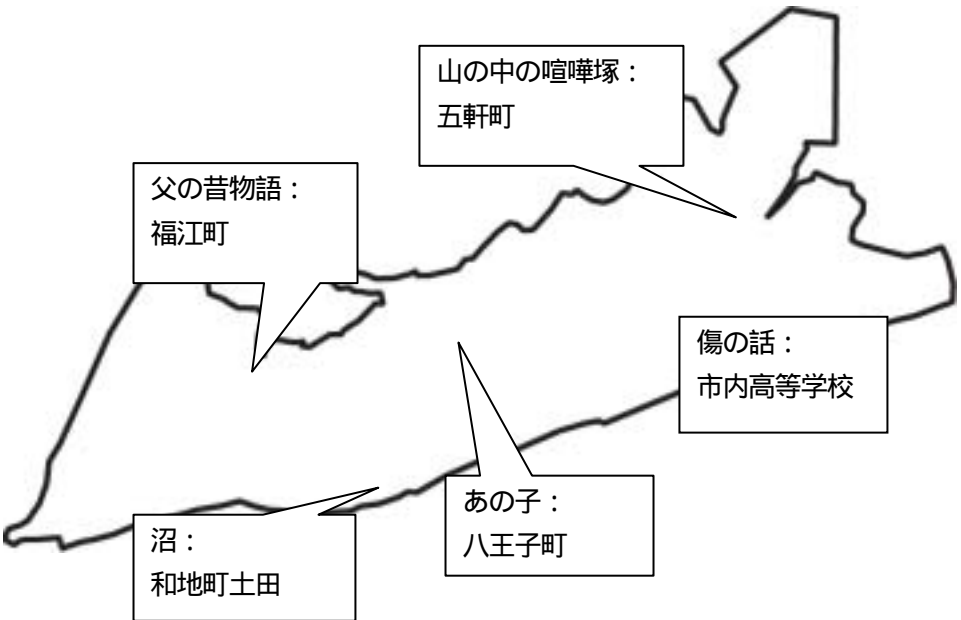
3

11

13

15

16



やしの実不思議塾2nd「ティーンズ怪談学校」優秀作品

# 山の中の喧嘩塚

やしの実不思議塾 2nd

「ティーンズ怪談学校」優秀作品

## 山の中の喧嘩塚

えす・きとつ（田原市在住 中学1年生）

田原市の五軒丁に喧嘩塚というふたつの塚があった。

なんでも、ふたつの塚のうち、片方だけに花や線香をお供えすると祟りがあるから、かならず、ふたつの塚に同じように花や線香をお供えをしなくてはならないと伝えられてきた。

僕は、伝説や迷信を信じていたから、こつこつお話には興味があった。

ある日、友達の下校と一緒に下校をしていたら、Y君が突然、

「田原に喧嘩塚という変な言い伝えがある塚があるんだけど、今度、父さんが仕事で田原に行く時、一緒に行ってみん？」

と言った。

もちろん、僕は行って見たかったけど、こつこつ言った。

「でも、それって、もうだいぶ昔になくなってしまった塚じゃん？」

しかし、Y君は、自信を持って、

「それを探すために行くんだよ」

と言った。

すると、横からK君が入ってきて、

「お前ら、喧嘩塚行くの？」

と言った。

なぜ、K君も知っているのか、と訊いたところ、K君も半年前ぐらいに田原に行って探したことがあるからだそうだ。結局、塚は見つからなかったという。

「お前ら行くんだっつたら、オレも行くわ」

とK君は言った。

しかたがないので、僕は、しぶしぶ賛成した。

ついに行く日が来て、僕はY君のお父さんの車に乗り込んだ。

昨夜は、緊張してまったく寝れなかったため、僕は、車に乗ったら、スグに寝てしまった。

二時間くらい経つただろうか。僕は、K君の声に起こされた。

目を開けると、車が山道をズレて、巨大な木にゲキトツしていた。

Y君のお父さんは、本当なら仕事場に着いていなければならぬ時間だ。

どつしてこつなつたのか、とK君に訊くと、K君は

「Y君のお父さんが仕事に遅れそうだから、たぶん誰も知らない山道に来たら、目の前にシカの群れが飛び出してきて、よけたら、道をそれてこつなつた」

と言った。

Y君のお父さんは、この山を越えれば町へ出られるはずだ、と言った。

僕は

「じゃあ、今、車が来た道を戻れば山道に出られるでしょ」と言つた。

しかし、車が来た道は、みんなが探してもどこにもない。

だんだんと日が落ちてきた。

するとY君のお父さんが

「よし、とにかく下りてみよう」

と言つた。

みんなあまり賛成ではなかったが、助かるのはそれしかないと思つて、Y君のお父さんについていった。

だが、どんなに歩いても山のふもとにつかない。もう辺りは真つ暗だ。

Y君のお父さんは

「もう少しだけ歩いてみよう」

と言つた。

しかし、その瞬間、雨が降り始めた。

僕たちは、走つた。

すると、だいぶ近くに小さな小屋があつた。僕たちは、

そこで一休みすることにした。

すると、突然、小屋の奥から物音が聞こえた。

僕たちは、そちらへおそるおそる行つてみた。

すると、そこには、ふたつの塚があつた。

音は、その塚から聞こえてくるようだ。

僕たちは、これが喧嘩塚だ、と思つたから両方の塚に花を供えた。

しかし、Y君のお父さんは、片方の塚にしか花を供えなかつた。

だが、小屋の中は暗くて、Y君のお父さんが片方にしか  
供えなかったのは、誰にもわからなかった。

次の日の朝、小屋の中で寝ていた僕たちは、起きてみる  
と、Y君のお父さんがいなくなっているのに気がついた。

もしかすると……。

僕たちは、塚に供えてある花の数をかぞえた。

片方は8本、もう一方は、7本しかない。

Y君のお父さんだけ片方にしか入れていないのだ。

僕たちは、全力でお父さんを探した。

すると、Y君の叫び声が聞こえた。

僕は、そちらへ向かったが、途中で右につまづいてしま  
った。

僕は、倒れたままだった。

目を開けると、家の自分の部屋に寝ていた。

あれは、夢だったんだろうか。

僕は、Y君の家に電話をかけた。

Y君に夢の話をする、Y君も同じ夢を見たという。

お父さんは、大丈夫か、と訊くと、朝から仕事でない  
と言った。

しかし、Y君のお父さんは、ずっと帰ってこなかった……。



## 優秀作品選評

この作品に描かれ、作者が体験した喧嘩塚については、愛知県田原市図書館に蔵書されている「蔵王 5（田原区文化誌編集委員会編）」に、その伝承が、掲載されている。作者は、執筆にあたり、既存の伝承をベースに置いた。この手法を選択したことで、物語は、現実味を帯びていく。

その伝承とは、こうだ。

徳川家康が狩りのために田原に出かけた。その中に岡部と中川という男がいた。

ふたりは、シカを撃つための鉄砲の所有権を賭けて、その場で走り比べをした。

ふたりは、ほぼ同時に鉄砲に辿り着いたため、喧嘩となった。

惨劇はそこで起きた。

中川の家来が岡部を斬り殺し、その責めを負って、中川もその場で切腹して果てた。

ふたりがほぼ同着だったためだろうか、その供養塚は、ふたつ作られた。

作中で説明されているとおり、両方に同じように花や線香をあげなければ祟りがある、とされた。

今では取り壊され、なくなっているという事実も、作品のとおりだ。

が、この書籍には、どのような祟りが起こるかは、書かれていない。この書籍を読むだけでは、謎は解けないのだ。

その謎を偶然にも作者は自ら体験し、解明することになる。

祟りのカギは、シカにあった。

家康の家来であった岡部と中川は、シカを撃つための鉄砲を賭けて争った。そして、作者を乗せた車は、シカの群れを避けようとして、事故を起こした。

来た道をもどろうとしてももどれない。作者たちは、山に封じ込められたのだ。

ありえないと言いつれ切れない。シカを神仏の使いとしてあがめる信仰は、今も全国に見られるからだ。

Y君のお父さんが見たシカの群れは偶然なのか。それとも、シカたちは、警告か導きの意図をもって、姿を現わしたのか。

いずれにしても、シカは、喧嘩塚と関係がある。そこを

読者に暗黙のうちに感じさせる筆力が、この作者にはある。

さて、この作品の大きな魅力のひとつに、ストーリーがダイナミックである点が挙げられる。

乗っていた車の事故、暗く雨の降る山中の彷徨ほうこう。そして、

辿り着いた小屋で見つけるふたつの塚

読者は、先が読めないストーリーに惹き込まれ、作者同様、その小屋に誘い込まれていく。

読者は、読みながら「おや？」と思うだろう。なぜなら眠っていた作者は、車が「ゲキトツ」したにもかかわらず、その衝撃にも目覚めなかったのだ。

それも、ラスト手前の夢オチに巧くつながり、ありがちな技法に新鮮さを感じさせてくれる。

車の同乗者のうち、ひとりだけ例外がいた。

Y君のお父さんである。

お父さんは、仕事のために、たまたま田原に向かっただけなのだ。

それに引き替え、作者たちには、一定の「興味」があつた。

興味の中には、喧嘩塚への畏怖いふと畏敬いけいの想いもぶくま

れていただろう。

シカの群れ、戻れない道、夜闇、雨

それらの障害は、祟りへの関心のないうまま、その場所に踏み込んでしまったY君のお父さんに向けてもたらされたものではなかったか、という読後感を読者に抱かせる。

ふたつの塚は、作者たちに供養してほしい、という願いと、供養の仕方を間違えた者を許さない、というふたつの意図をもって、出現したようにも思える。

そして、Y君のお父さんだけが、ふたつの塚に均等な供養を怠った。

ここまでを、喧嘩塚は、夢という手段をもちいて同乗者たちにアプローチした。おそらく、全員が別々に同じ夢を見たのだろう。

喧嘩塚のほんとうのおそろしさは、ここにありとを感じる。

実際に向かうまでもなく、喧嘩塚に行ってみたいと思っただけで、その人々は、夢の中で試され、その試しに失敗した者には即刻、罰が下される。

Y君のお父さんのように、神隠しさが消されてしまつのだ。

ラストに用意されたこのスリルは、最大のインパクトと

田原町五軒丁という場所への誘惑を込めて読者を吸い込んでいく。

作者たちが夢の中で見たように、喧嘩塚は、今でも、それを訪ねるものを待っているように思える。

ということとは、逆に考えれば、ほんとうに供養したいと念じるならば、喧嘩塚は、その者の前に今も姿を現わしてくれるのではないか。

そつという想像も湧き起る。

しかし、ふたつの深い恨みのただよう塚である。そこを訪れるには、ふたりの孕んだ無念を知らなければならぬ。多くの困難を乗り越えてでも、甲いたいという純粹で一途な想いがあれば、願望は実現する。

それは、まるで人生のようだ、と感じる。

望むものの中には、必ずハードルがある。そのハードルを真剣に乗り越えることでしか、望みは達成されない。

祟りというテーマに挑み、訓話を暗示として盛り込ませたこの作品は、ドラマとしても重量感としても一級だ。

ほくも、今夜、喧嘩塚のことをよく調べた上で、無念の死を遂げたふたりの侍に想いを馳せながら、眠ることにしよう。

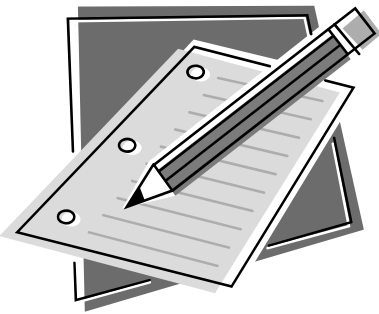
喧嘩塚の夢を見て、ほくの身になにも起きなければ、喧嘩塚を訪れてみようと思った。

ふたつの塚にふさわしい同じ数の花と線香を大切に持つて。

選者代表 ゆうさきじん  
悠崎仁

やしの実不思議塾 2nd「ティーンズ怪談学校」

# 参加作品（作者 50音順）



参加作品（作者50音順）

傷の話

稲垣（田原市在住 高校2年生）

日差しが強く照りつけるある日のことだった。

ひとりの編入生がやってきたのだ。

わたなべはな

「渡辺華です」

ひかえめだが芯の通った声は、一学期末というなんともおかしな時期の編入生そのものを表しているように思えた。高校での編入生とは珍しいもので、周囲は彼女をしきりに噂していた。

前の学校で事件を起こしたとか、不登校だったとか。

結局、話してみると、案外ふつうであった渡辺さんは、いわゆる転勤族で、この学校へも、父親の仕事が理由で通うことになったようだった。

渡辺さんが編入してきて三日目、その日の帰りのことだ

った。

季節柄、まだ日は落ちそつにない。

雲が浮かぶ空の下、数人の男子がボールを投げ合いながら還るのが見えた。

この時間にこんなところにいるのだから、大方、どこかの文化部なのだろうと見当をつけて、さあわたしも家に帰ろう、そう思った時だった。

ひとりの男子が投げたボールが、一本の木の上に引っかかった。

あまり関係はないのだが、わたしの学校は、渡辺華山と

わたなべかさ

ゆかりがあり、学校前に銅像が建っている。

その像の上に、男子生徒が引っかけたボールがあるのだ。像によじ登れば取れそうだったが、そういうわけにもいかないらしく、最終的には、引っかかった木の根元を蹴り、揺らして取る、という方法に至ったようだった。

順調にボールは落ちたのだが、一緒に落下してきた木の枝が像の顔に引っかかって、白く線が入って、傷ついたように見えた。

次の日、登校してみると、渡辺さんは、顔にガーゼを貼

っている。

驚いて理由を訊くと、虫にびっくりしてよるけたら、道端の木で擦ってしまったというのだ。

顔は女子の命なのだから大事にしなくては、という旨を伝えつつ、大事がなくてよかったね、と労いの言葉をかけた。

渡辺さんは、ところどころ抜けている性格らしく、昨日ケガをしたというのに、また転び、手首あたりに擦り傷を作っていた。

帰り道 像をふと見ると、昨日の傷ともうひとつ、組んでいる手に傷がついていた。

時期外れの編入生が来て5日目。登校しても渡辺さんの机はなく、本人の姿もなかった。

何事かと思い、クラスメートに彼女の所在を訊いたのだが、みんな、口をそろえて、こつ言った。

「渡辺さん？ そんな子、いたっけ」

なぜだが知らないが、どうやらみんなから彼女の記憶が抜け落ちているらしい。

これは、どうしたことか、と頭を抱えていたら、ひとりの友人がやってきて、わたしにこつ言った。

「ねえ、さっきあんたが言ってた渡辺さんって子だけじゃっぱりそんな子いないよ。先生にも訊いたけど、そもそも編入生なんて来てないって」

この子は、なにを言っているのだろう。

編入生？ ねえ、聞いている？ という彼女に向かって、

わたしは、ひとこと呟いた。

「渡辺さんって、誰？」

校前の像は、今でも変わらず、凜とした態度で佇んでいる。

## あの子

河合（田原市在住 高校2年生）

わたしの住んでいる八王子町では、毎年、夏休みに子供会主催の花火大会がある。

花火大会といつても、PTAの人が配ってくれる手持ち花火や各自準備してきたものをみんなでやるといった、ちいさなイベントだ。

薄明るかかった空が、いつの間にか暗くなり、持ってきた花火も残りわずかになってきた頃。

「ねえ。ヒマだし、『きもだめし』やる」と、ある中学生の男子が言った。

わたしは、その時、小学3年生で、人より臆病だったが、去年もやってたし、今年も、行ってみよう、と思い、少し怖いと思う気持ちもあったが、行くことにした。

ルールは、鳥居をくぐってお宮さんに行き、お宮さんの横を通って林を抜け、最後にお墓を回ってゴール、といっ

たものだった。

途中に『おどかし役』もないので、怖い方が好きな人にはスリルが足りないかもしれないが、怖がりのわたしには、充分だった。

先頭を中学生男子が歩き、その後ろに数人が続いた。

鳥居をくぐると、そこから一気に気温が下がったような気がした。

振り返ると、木々に囲まれた真つ暗な中、鳥居の外だけが明るく浮き出て見えた。

予想以上の暗さに引きかえしたくなかったが、懐中電灯はひとつだけだったので、隣の人の服をつかみ、我慢して連れて行っただ。

少し進むと、お宮さんが見えた。

そこだけ木に囲まれておらず、月明かりに照らされてくつきりと形がわかった。

が、幼いわたしが注目したのは、そこではなかった。

明るく照らし出されたそこには、ちいさな女の子が座っていた。

見たこともない知らない子だった。

黒いワンピースに、黒く長い髪、黒い肌に黒い顔

なんであんなに明るいのに見えないの。

そう思った瞬間に、その顔らしき場所がぐるりと回って、「ちびらに向きかけた。

途端、誰かが、

「オバケだー!!」

と、叫んだ。

同時に、我に帰り、どんどん恐怖がこみ上げてきた。

気つくやうに啼きながら、声を上げて走っていた。

その声に反応し、周りもわつと逃げ帰る。

途中でつまずき、転んだが、痛みなど気にせずじただただ走った。

みんなが鳥居を抜けると、真っ青な顔をしたわたしたちを見て、大人たちは、ひどく驚いたようだった。

その日、もう一度見に行こう、という人は誰一人いなかった。

次の日、そのちいさな女の子の話をするよ、

「そんなの見てないよ。誰かが『オバケだー!!』って叫んだから怖くなって逃げた」

と、みんな口をそろえて言っていた。

それで、

「じゃ、その叫んだ人って誰だったの」

と訊くと、

「お前じゃないの」

「あたしじゃないよ、アンタでしょ」

「ちがうちがう」

などと言った軽い口ゲンカがはじまってしまい、結局、誰が叫んだのかはわからずじまいだった。

家族にもその話をしてみたところ、

「戦争で亡くなった子供かな。それが、捨てられた人形の幽霊かもね。あそこいろいろ捨てられるから」という結果になった。

結局、あの子が何者だったのか、叫んだのは誰だったのかは、今でもわからない。

けれど、この季節が来ると、どついても思い出さずにはいられない。

それくらい鮮明にあの光景が目に残っている。

「あの子は、まだ、あの場所にひとりで座っているのかな」

そう思うと、なぜか、彼女を救うように思った。



## 父の昔物語

土肥壮太（田原市在住 高校2年生）

「俺がまだ、こーんくらいちっちゃかった頃の話を」

と、父が僕の目の高さまで手を持ってきて言った。

僕は、福江町に住んでいて、この体験談は、小学生の頃に聞いた話である。

父は、続けた。

「山田の山に、友達3人とカフトムシを捕りに行ったんだ。夢中になって、時間も忘れてなあ。気がついたら空は夕暮れ色に染まっていて、場所もどこだかわからなくて、適当に歩くことにしたんだ。

しばらく歩いていて、草木が切られ、整えられた道みたいなのところに出てな」

と言つと、父は、酒をひとくち呑み、ノドを潤す。

僕は、話の続きが気になって、

「それで？」

と、父を急かした。

うん、それでな」と、父は、また語りはじめる。

「そこに出るとな、友達が疲れた、と言つて座り込んでしまったから、俺たちは、休むことにした。しばらくすると、なにか音がした。訊くと、みんなも聞こえるつて。耳のよい友達が、歌だ、こちから聞こえる、と言つてその方向に歩いて行ったんで、俺と、もうひとりも気になって、ついて行つた。進むにつれて、歌はだんだんハッキリと聞こえてきて、歌っている人の姿が見えてもいいところまで近づいたんだが、そこに人はいなかつたんだ。代わりに、そこには、ちいさな墓があつた。一瞬、時間が止まった感じがして、頭の中は、真つ白だつた。歌は聞こえてたのに、人はいないんだもん。気味悪く思つて逃げて、知っている場所に出て、なんとか帰つてこれたんだ」と。

語り終わると、父は、満足そつな笑顔で、

「ウンだ、と思つたら、その時のふたりを呼んできてやるから訊いてみる、おなじこと言つぞ」と言つた。

中学一年の夏、僕は、友達3人にこのことを語り、僕達4人で山田の山へと足を運ぶことにした。

## 沼

三谷（田原市在住 高校2年生）

おばあちゃんの家は、土田町にある、伊良湖岬よりも田原側に存在するちいさな村である。

わたしは、夏にそこにも行く、おばあちゃんの家は、ひいおばあちゃんも一緒に住んでいる。

わたしは、ひいおばあちゃんが今年でいくつかは知らないが、太平洋戦争の時には産まれていたらしい。

しかし、それよりくわしいことは、わたしは、知らない。夏の夕方は、まだ明るく、外の様子は見える。夏らしくない赤い空を、窓側でぼーっとなにも考えずに見ていた。

ふつと横を見ると、ひいおばあちゃんがなにも言わずにとなりに座っていた。わたしもなにも喋らない、遠くで鳥の鳴き声が聞こえるだけ。

その微妙な空気に耐えられなくなって、わたしは「散歩に行く」

とちいさく呟いて、家を出て行った。

ひいおばあちゃんが、

「沼に気をつけて」

と言ったような気がした。

もちろん、このあたりに沼も田んぼすら、ひとつもない。

土田の中心に公園がある。ちいさな子供が遊ぶためにつくられたちいさな公園だ。

しかし、その公園には広い平地が横にあつて、そこでバスケットボール、野球をして遊ぶのだ。

わたしは、家にあつたバスケットボールを持ち出して、軽く投げて遊ぶ。

日が暮れて、そろそろ帰ろうか、と思い、ボールを一回ついた時、階段の角にあたって大きくボールが跳ねてしまった。

わたしは、高く上がったボールを見上げて、広い平地の隅にある木々の中に落ちたのを確認した。

「ああ、やっちゃったよ」

自分にあきれながら階段を降りて、平地の隅に足を進めた。

ボールが落ちたところまで、あとさ歩くくらいの距離にな

った時、足が地面を踏み外した。

声を上げる間もなく、視界が赤くなっていき、盛大に頭を地面に打ちつけていた。

あとは、わたしの叫び声だけが響いていた。

家に帰って頭を冷やしていると、ふとボールを公園に忘れたことに気がついた。今日は、災難だった、と思つていと、父がやつてきた。

「靴、なんで濡れてるんだ」

そんな訳ないじゃん、と返して、玄関に行くと、わたしの靴の片方だけ濡れていた。

そして次の日の朝、ひいおばあちゃんのところへ行った。

「沼、どこにあるの？」

わたしは、訊ねてみた。

ひいおばあちゃんは

「今はどこにもねえ」

と云じた。

すると、ひいおばあちゃんは、「こつ続けて言った。

むかし、大きな沼に主がいた。<sup>ぬし</sup>

誰も見たことはない主だった。

戦争が終わって、その沼が埋め立てされる時に、たくさんの人が病気になるってね。

だから、主のための石碑を建てたんだよ。

そっか、と、わたしは言つて、公園にボールを取りに行つた。

ボールを見つけると、となりに大きな石が転がっていた。

わたしは、その石を立て直して、すみませんでした、と両手を合わせて言つた。

## 参加作品講評

### 「傷の話」講評

愛知県立成章高校のすぐそばに池之原公園がある。

田原市の生んだ幕末の先覚者・渡辺華山の像が、その園内にあることから、作者が体験した出来事は、成章高校に関わりがあるとも考えられる。

編入生の名が「渡辺華」であることも、かの偉人とのむすびつきを読者に連想させる。

さらに、学期末の編入生とは、いかにもミステリアスであり、ファンタジックでもある。

父親の都合とはいえ、その時期の編入は、授業の内容、進捗など学生、学校双方への影響があるはずだ。なぜ、次の学期まで編入を待てなかったのか。

その疑惑だけでも、読者は、まゆむらたぐ眉村卓の「なぞの転校生」、

みやざわけんじ

宮沢賢治の「風の又三郎」など過去の名作の流れを汲む、

涼やかで甘酸っぱい青春の風を感じられる。

渡辺華山と渡辺華の関係は、やはり名前の類似だけではないことが、物語の進展にしたがってわかってくる。

華山の像に傷がつくと、華の顔にも傷がつく。その傷は、像の傷に比例して増えていく。

そして、作者は、華の顔の傷をいたわった。

同じ若い女性だからであろう。

女の子は、顔を大切にしなければいけないよ。

そのやさしさが、あるいは、ラストへの伏線だったのかもしれないと、読後に思わせてくれる。

華がこつ然と消えると同時に、クラスメートはおろか、

学校すべてから渡辺華の記憶が消えた。

その記憶が、なぜ、作者にだけ、わずかに永く留まったのか。

それは、あるいは、ゆいいつ、自分の傷を親身になって案じてくれた作者への、友情と惜別と感謝の証だったのかもしれない。

短い間だったけど、ともだちになってくれて、ありがとう。

不思議な中に、そんな清々しい想いも読者に残してくれ

る。

さりげない天候の描写も創作世界に奥行きを与えている。なぜ、この時期に、なんの目的で渡辺華が、この地を訪れ、全員の記憶を消して、去って行ったか。

その理由を明らかにしない手法も、読者の想像力を永く維持させてくれて、心地よい。

優れたショートショートは、長編化が可能か否かにあるといふ。

その意味で、本作は、まちがいに佳作である。

## 「あの子」講評

田原市八王子町には、現在、ほむたわけのみこと 誉田別尊（あつじんてんのつ 応神天皇）を主祭神とする八幡社がある。

小学生の時分、作者が夏休みのひとときを過やしろこした鳥居やお宮さんがあった場所が、この社かどうかはわからない。が、この作者もまた、そこで忘れえぬ体験をした。

夏休み。花火大会。そして、なりゆきではじまった肝試し。

この物語を読む時、それらのすべてが光にみちていることに気づく。

鳥居の内外の明暗のコントラスト、つかの間のきらめきを遣して消えていく花火、大地を照らす月光。

それぞれ質的に異なる色彩をもつ光たちが幻想的な背景を造り出し、各場面を象徴しているのだ。

そういう描写の技法を巧くつかい、作品をつなげてコンパクトにまとめる力は非凡といえる。

まず、読者が感じるのは、全身を黒で塗られたような「あの子」、顔らしき場所をぐるりと回して、作者たちを見据えようとした「あの子」とは、いったいどのような存在なのだろう、という関心である。

太平洋戦争において、現・田原市でも多くの方が亡くなっただ。

勤労動員として、渥美半島でも、多くの女子学生が学徒勤労報国隊や女子挺身隊などとして国への奉仕を命じられた。

少女たちは、時代に押しつぶされそうになりながらも、必

勝」の鉢巻きを締め、憤れないきつい作業に従事し、懸命に働いただろつ。

が、敗戦の気配が濃厚になっていく昭和19年以降、渥美半島もまた、米軍の爆撃にさらされる。

軍の工廠が爆撃され、働いていた女子中学生と女子高校生計数百名が亡くなった。

終戦前日の昭和20年8月14日にも、空襲を受け、機銃掃射によって渥美線に乗っていた地元の女子中学生数名が即死している。

それらの無念。

言い尽くせぬ想いが今も残り、夏という季節を借りて、作者たちに語りかけ、伝えようとする。

「ぐるり」と向く黒い顔に、その想いの深さを感じない読者はいないだろう。そう考える時、風化が進む戦争の記憶を、高校生という若い作者が著してく

れたことを嬉しく、そして、ありがたく思わずにはいられない。

また、この時代、国策によって敵性文化つまり、アメリカなどの戦争対象国の文化が排除されたことも忘れてはな

らない。

排除されたものの中には、人形もふくまれていた。

戦前、アメリカから寄贈された人形が、現・田原市にも数多くあり、人々に親しまれていたが、それらも「敵国の製品」というだけで焼かれ、破壊された。

つまり、作者が家族から聞いた話には史実としての裏付けがあるのである。

人形は、まさに人の形をしている。言つまでもなく、それは、持ち主の深い愛情を浴び、時として「人」になる。

その果てに捨てられた人形は、あの懐かしい愛情を求め、捨てた持ち主を探し求めるのかもしれない。

まして、社という神聖なる場所である。そこに今も無造作に様々なものを捨てる者たちへの警鐘が、本作に描かれている点は高く評価するべきだ。

この物語のドラマとしての秀逸さは、どんでん返しの妙にある。

オバケだ、と誰かが叫んだから、誰も逃げた。

しかし、黒つくめの女の子を見た人は、じつは、作者だけであり、叫んだ誰かもわからない、という後日談。そのオチの落差の大きさが気持ちいい。

恥ずかしさのあまり、みんなが「見なかったこと」にしたのか、あるいは、見たのは、ほんとうに作者だけだったのか。

もし、後者だとすれば、「叫んだ誰か」は、ゆいいつ姿を見せた作者に向けてメッセージを発したのかもしれない。

そのメッセージの真意は幅広く解釈できる。黒づくめの少女が、「叫んだ誰か」と関係があるのかもわからない。

忘れてはならないこと、してはならないこと。解けない謎をふくめ、様々な大切なことを考えさせてくれる作風が好ましい。

## 「父の昔話」講評

再読して、ぼくは、選者としての自分のあやまちに気がついた。

一読した時、ぼくは、この物語は、主人公の「僕」が山の山に向かい、自ら体験して完結させるべきではないかと短絡的に考えてしまっていた。

しかし、それでは、本作を読んだことにはならなかった。これは、作者の探検によって、父の体験の反証が必要な作

品ではなかったのだ。

これは、父と子の間にたゆたう信頼の物語であった。

生まれたばかりの赤ん坊に、いきなり自分の体験した「ふしぎ」を話す親はいない。「ふしぎ」とは、それを理解するまでに年月が要る。

そして、息子には、もう、このふしぎなエピソードを話してもよい年齢になった。そう感じたからこそ、父は、酒で口を湿らせ、話し始める。

ぼくは、そこに、よくここまで育ってくれた、という父の、言い尽くせない想いを感じるのである。

父は、自分の話が信じられなければ、同時に同じ体験した友人を呼んでやると言った。

しかし、おそらく、作者は、それをしていない。父の語るふしぎの真実味を、語り終えた父の満足そうな笑顔の中に見出したのかもしれない。

父の口伝を信じつつ、山登りができる体力を得た中学生になった時、作者は、父の足跡を辿りはじめる。

男の子は、父の背中を追ったのである。そこに、ぼくは、作者と父親との間にかよったかさを感ずる。

息子は、単に父親の語るふしぎを理解しただけでなく

信じたのである。

この物語も、新しい土地の伝説が生まれる可能性を孕んでいる。

田原市山田町の山中に分け入ると、歌が聞こえる時があるというのである。しかも、その歌は、山中の墓近くでもっともよく聞こえるという。

墓はどこにあるのか？どんな歌なのか、歌詞はあるのか、男女どちらの声なのか。歌声は、どのような雰囲気をもたらせているのか。

掌編だからこそ、疑問と興味は、読者の中で大きくくぐらみ、刺激される。

それにしても、こういっ話を、今、日本中の父と子のどれほどが交わすことができるだろう。

父は酒を呑み昔語りをし、息子は、物語の先をせがむ。そんな光景がどれほど残っているだろうか。

田原市の新たな言い伝えを発掘してくれた感謝とともに、ふたりの間に流れるおだやかな時間を感じさせてくれる。

「俺がまだ、こーんくらいちっちゃかった頃の話し」  
そのセリフを口にする父親の笑顔を、ぼくは、作中に自然に見出す。

父から子へ。子が父へ。

双方の愛情が湧き出でる「ふしぎ」な一篇である。

## 「沼」講評

これまで「沼」というタイトルの傑作ホラー作品は数多くあり、その多くが沼そのものが舞台だった。

ところが、本作は、その先入観を気持ちよく吹き飛ばしてくれる。

太平洋にほどちかい田原市土田には、かつて沼があり、誰も見たことのない主がいたという。

ところが、その沼が埋め立てられ、なくなると、人々が次々に病没する。そこで主を慰めるために石碑が建てられる。

が、その時間がその経緯を風化させ、石碑の存在そのものが忘れ去られつつある。

その石碑こそがテーマだということを、読者は読み進むにつれて、知らされる。

まず、そこが非常に興味深い。  
沼に棲む主。それはどのような姿形をしていたのか。



人々を病気にしたのは、主が自らを葬った祟りか、それとも、戦争という愚かな行為をした人間という種族に対する戒めか。

父親が、作者の靴が濡れていることに気づいたのは偶然だろうか。

あるいは、父親は、その喪われた沼のことを聞き知っていて、大切な娘が、石碑に気づかずその場所に足を踏み入れてしまわないか。

それを曰々、そつと見守っていたのではないか。

その家に代々語り継がれてきた秘密。

それが垣間見えるかすかな怖さと、子を思つ親の想いが同時に感じられるよい描写である。

だが、ここで謎が残る。

沼の主あるいは石碑は、作者を殺さなかったという点である。

軽いケガを負わせただけで、作者は解放された。

そこが、主の実態への興味をふたたびふくらませてくれる。

作者が赦されたのは、沼の経緯を語り継ぐ家であったからではないか、と考えたい。

作者の一族は、迷信、迷妄とバカにせず、忘れ果てることを恐れてきた。それが、作者が「警告」だけで済んだ理由ではなかったか、と考えたい。

それを直感したためだろうか。作者は、すぐに自分がケガを負った場所にもどり、石碑らしき石を見つける。

作者の「すみませんでした」には様々な意味が込められていただろう。

知らなかったこと、知らずとしなかったこと、忘れてはならないこと、守らなければならぬこと。

それらを怠っていた自分への悔恨を込めた合掌。

過去に想いを馳せる若い作者の清らかな想いが、鐘の音のように読者の心に沁みわたる心地よい読後感がある。

## 解説

「やしの実不思議塾」のティーンズ怪談学校」は、そのタイトルのとおり、第2回を迎えることができた。

今回は、5人の作家が2012年7月最後の日曜日に、愛知県田原市図書館に集合し、田原市に伝わるさまざまな「ふしぎ」に挑戦してくれた。

今回の執筆者は、高校生4人に中学生ひとりという構成、計5人の作家が5篇の作品を生み出してくれた。

優秀作品の栄冠は、中学生であるえす・きとつ氏の頭上に輝いた。作品は、「山の中の喧嘩塚」である。

これは、それ以外の4名の作品が劣っていたということとを意味しない。

選者たちが、各作品世界を拝読し、どれだけ強く、作者の体験を追体験してみたい、と感じられるか、という一点において、えす・きとつ氏が他の参加者にわずかに勝ったと考えていただきたい。

読んでいただければ、優秀作品にない秀逸さやおもしろさが、他の4作にあることは、ぼくをふくめ、多くの読者が感じられるだろう。

今回は、執筆会場に参加者評価用紙を用意し、参加者同士で他者の作品を評価してもらった。

評価項目は、「不思議さ」、「面白さ」、「怖さ」、「興味」の4つである。

以下に、各作品の集計結果とコメントを示す。

「山の中の喧嘩塚」(合計5.6点)

不思議さ：1.6点

面白さ：1.3点

怖さ：1.6点

興味：1.1点

コメント：

「くった」が多い。夢オチ。伝説の話をしていてけっこうおもしろい。

・文章末が「く」と言った「ばかりだったが、物語の構成がおもしろかった。

・ストーリー性があつてよかった。夢オチかと思つたらそうじゃないことに驚いた。

「傷の話」(合計6.2点)

不思議さ：17点

面白さ：17点

怖さ：15点

興味：13点

コメント：

- ・渡辺華さんがいったいどうなったのが気になるのですわ。
- ・上手く渡辺華山を絡めて、しっかりと怖さがあってもしろかった。

「あの子」(合計57点)

不思議さ：16点

面白さ：14点

怖さ：17点

興味：10点

コメント：

- ・怖いが淡々と話している感じがいい。
- ・話し方が臨場感あふれていてよかった。実体験のような書き方でリアルだった。

「父の昔物語」(合計56点)

不思議さ：17点

面白さ：14点

怖さ：14点

興味：11点

コメント：

- ・語り方がすごく雰囲気にあっている。
- ・文の構成と言い回しが綺麗だった。終わり方が気になる感じだった。

「沼」(合計60点)

不思議さ：17点

面白さ：16点

怖さ：14点

興味：13点

コメント：

- ・実体験がすごくくて後味がふしぎな感じがよかった。
- ・ひいおばあちゃんが話の中で大きく関わっていておもしろかった。

最高得点をマークした「傷の話」の作者・稲垣氏を称え

たい。一方で、得点は伯仲しているといえるし、そのわずかな差が重要なのだともいえる。

確実なのは、これは、当日、その場において、作者自身による朗読を聴いた者ならではの評価だ、といつことである。

作家各位は、それぞれに、この「おみやげ」を大切に胸に抱き、自分の中にある夢や未来像の糧にしてほしいと願う。

さて、前回同様、ぼくたちは、今回も田原市に眠るいくつかの新しい民族的エピソードを得た。

五軒丁：喧嘩塚。今はないが、そこに行こうとする者に夢を見させ、試す。

八王子町：神社に黒つくめの少女が出現。

山田町：山中の墓から歌が聞こえる。

土田町：町の中心にある公園に石碑（石）があり、近寄るとケガをする。

このほか、渡辺華山の像が校内あるいは付近にある学校の生徒は、傷をつけるなど、像を粗末にあつかってはならない、といえそうな現象も報告された。

いずれも甲乙つけがたい貴重な体験であり、大切な記録だと感じる。

これら計5作を集めたアンソロジーが制作され、図書館内で展示される。

田原市民だけでなく、多くの人々がこの作品集を手にとっていただきたいと切に願う。

わずか2回の実施で、7つから8つの、おそらく多くの人が知らない逸話が、そこに蒐集されているからである。

見慣れた街の見飽きた路地にひそむふしぎ。そして、それらは、今にも時間の流速に吹き飛ばされ、消え果ようとしている。

そのすべてが、田原市の文化的財産である。だからこそ、喪ってはならないと思う。残さなければならぬと思う。

その企画に、毎年、若き地元作家たちが挑戦してくれる。

選者として、これほど嬉しいことはない。

来年の夏にもまた、新しい記憶が掘り起こされ、記録されることを、そして、すばらしい作品たちの誕生に立ち会えれば、これにまさる喜びはない。

最後になったが、今年も、この有意義な企画にお呼びい

ただいた田原市図書館長豊田氏、そして、担当者として企画の推進からこまやかな気遣いに行たるまで尽力いただいた渡邊さんほか関係するすべてのの方々にお礼を申し上げたい。

やしの実不思議塾2nd 「ティーンズ怪談学校」

講師・選者代表 悠崎 仁

悠崎 仁氏 プロフィール

小説家。ショートホラーで、創英社主催第10回超短編コンテスト優秀作品賞を受賞。同社刊「超短編傑作選 Vol.3」および「超短編傑作選 Vol.4」に作品を掲載。光文社主催「すこぶる奇妙にこわい話」コンテストで佳作となり、同書に入選作を掲載。電子書籍では、ファンタジーなど、すでに30以上のコンテンツを発売するなど、幅広く活躍中。産業カウンセラー、ペットロス・ケアサポーター。獣医師免許を持つ。



## おことわり

本作品集の作品は、平成24年7月29日開催の「やしの実不思議塾2ndティーンズ怪談学校」にて、田原市の地名、史跡等をモチーフに創作されたものです。実際の人物、団体、行事等とは関係ありません。

みどりの翼増刊号

『やしの実不思議塾2nd ティーンズ怪談学校作品集』

発行 平成24年10月12日

発行者 田原市図書館

連絡先 愛知県田原市田原町汐見5番地

TEL (0531) 23 - 4946

FAX (0531) 23 - 4646

tosho@city.tahara.aichi.jp

収録作品の著作権は、田原市図書館に帰属します。

本書の無断転載を禁じます。

© Tahara city library 2012

